

いつまで続くのかと不安になるような暑い毎日でしたが、10月に入るとさすがに涼しい日が増えました。制服も冬服への移行期間に入りましたが、暑かったり涼しかったり、その日その日で天気が違うので体調を崩しがちです。登校前にその日の気象情報をチェックして、万全の準備で出かけたいものです。

## ②履修登録期間迫る！ 1・2年次

中間考査が終了すると、10月20日(月)からの5日間は履修登録期間に入ります。特に1年次生にとっては、次年度の科目選択が重要です。産業社会と人間の授業中に、先生から履修にあたって注意すべき点の説明がありましたね。

まず理解しておくべきは、科目選択が将来の進路に影響を及ぼす可能性があるということです。自分の希望進路や興味を踏まえ、慎重に選択しましょう。

科目選択の優先順位は以下の通りです。

1. 希望する進路に関係する科目
2. 自分の能力や関心を伸ばせる科目
3. 進路には直接関係しないが、興味のある科目

一方で、次のような理由で選ぶのは避けましょう。

- ・「楽だから」選ぶ科目
- ・「友達と同じだから」選ぶ科目

理想的には希望進路に合った科目を選ぶのが望ましいですが、すべてをそれだけで埋められるとは限りません。進路がまだ明確でない人もいるでしょう。



たとえば1年次生で複数の進路に迷っている場合は、どちらにも対応できるよう普通教科を中心に選び、余裕があれば進路に関連した選択科目を加えるのがよいでしょう。



2年次生でこの時期にまだ希望進路がはっきりしないのは少し心配です。具体的な進学先まで決まっていなくても、どの方向に進みたいのかは考えておくべきです。

もちろん、科目選択を一度間違えたからといって人生すべてが失敗するわけではありません。しかし、選び方によって将来の可能性が大きく変わるのは事実です。実際に、卒業生の中には「古典を選択していなかった」「数学Bを履修していなかった」といった理由で、希望する大学に出願できなかつた例もあります。

進路が定まっていない人でも、志望する可能性のある学部・学科の出願資格や試験科目は今のうちから調べておきましょう。「まだ決まっていないから」と何もせずに時間を過ごしても、誰も代わりに決めてはくれません。迷うときは先生や友人に相談し、それでも最終的には自分で考え、決めることが大切です。

これは、総合学科に入学したときから、すでにわかっていたことのはずです。

## ③人生は選択の連続

長い目で見れば、人生とは「選択の連続」です。進学先、部活動、友人関係、将来の進路——私たちは日々、大小さまざまな分岐点に立たされています。選択とは分岐点であり、そのたびに歩む道が少しずつ変わっていきます。だからこそ、どんなに小さな選択でも、人生の方向を決める大切な一歩なのです。

もちろん、すべての選択に深い意味を込めることは難しいものです。「とりあえずこっちでいいか」と決めることもあるでしょう。そうした選択でも前へ進むことはできます。しかし、いつまでもその姿勢のままでいると、どこかで行き詰ってしまうかもしれません。自分の意思を持たずに進む道には、納得や充実感が生まれにくいくらいです。

「これでいいや」と思う選択と「こっちへ行こう！」と決めた選択とでは、同じ結果に見えて心のあり方が違います。自分の意思で選んだ道なら、困難にぶつかっても「自分で選んだことだから」と受け止め、前向きに努力できます。しかし、流されて決めた道では、壁に当たったときに立ち止まりやすいのです。

人生には正解のない選択が多くあります。だからこそ、選ぶときには「なぜこれを選ぶのか」という理由を持つことが大切です。たとえその理由が小さくても、自分の中に芯があれば後悔のない生き方につながります。



これから先、あなたたちは何度も分岐点に立ち、迷い、悩み、考えるでしょう。けれども、どんなに時間がかかるって、自分の意思で「こっちへ行こう！」と選べる人であってほしいと思います。一つ一つの選択を積み重ねていくことが、自分らしい人生を形づくるのです。

## 読書の秋！

「本を一冊読みなさい」と言わされたことがある人は多いでしょう。でも、本を読む習慣のない人にとって、それは苦行に近いものです。文字ばかりのページを前に「これを最後まで読むのかあ…」と思うと、ついスマホに手が伸びてしまう…。わかります。けれども人生のどこかで、「一冊の本をどうしても読まなければならない場面」は必ず訪れます。課題として出題される書籍、仕事で必要な資料、あるいは誰かの気持ちを理解するための本。だからこそ今のうちに“読む力”を育てておくことは、とても大切なのです。

とはいっても、いきなり分厚い長編小説に挑む必要はありません。難しく考えず、「読みやすいもの」から始めればいいのです。たとえば好きなマンガのノベライズ版や、映画で感動した物語の原作小説。こうした“身近な入口”から読書の世界に足を踏み入れるのは十分意味があります。本を読むことは勉強ではなく、娯楽でもあるのです。シナリオRPGのようにページをめくるたびに世界が広がる感覚を味わえれば、読書はきっとあなたの日常の一部になります。



「あの先生はどんな本を読んでいるんだろう?」とか、「高校生の頃、どんな本を読んでいたんだろう?」と想像してみるのも楽しいでしょう。聞いてみてもいいでしょう。もしかすると、あなたが心を動かされた本を、その先生も読んでいるかもしれません。本は時間も場所も越えて人をつなぐ不思議な力を持っています。

読書の秋。外の空気が涼しくなり、静かに過ごす時間が増えるこの季節こそ、本を開くのにぴったりです。中間考査が終わったら、気軽に一冊手に取ってみませんか。どんなジャンルでも構いません。「読んでみようかな」という気持ちが、あなたの世界を少し広げてくれるはずです。王子総合高校の図書室にも素晴らしい本がたくさん並んでいます。お気に入りの一冊に出会えるかもしれません。この秋は、ページをめくる音を楽しむ季節にしてみましょう。

## 食欲の秋！

日本では昔から「食欲の秋」と言われてきました。暑さがやわらぎ、空気が澄んでくると自然とお腹がすくようになります。これは気候の変化だけでなく、秋が多くの食材の「旬」にあたることとも深く関係しています。稻が実り、新米が出回り、秋刀魚が脂をのせ、栗やさつまいもが甘く育つ。果物では梨や柿、ぶどうなどが旬を迎えます。まさに秋は、日本の大地と海が一年の恵みを惜しみなく差し出す季節なのです。

こうした「旬」を知っていることは、単に食に詳しいというだけでなく、教養の一つだと私は思います。旬を理解するということは、自然の循環や気候の変化、地域の文化を感じ取る感性を持つということでもあります。反対に、季節の移ろいに無頓着な人は、どこか味気なく、知的な深みを欠いた印象を与えてしまいます。教養とは本や知識だけでなく、日々の暮らしの中から培われる感性でもあるのではないでしょうか。



さらに言えば、実際に旬の食材を調理してみることは、教養を実感的に深める行為です。レシピを見ながら食材を切り、火加減を調整し、味を整える。その過程で、食べ物がどう変化するのかを目で見て、香りで感じ、舌で確かめることができます。秋刀魚を焼くときの香ばしい匂い、炊き立ての栗ご飯の湯気、出汁をとるときの昆布の香り——これらを五感で味わうことこそが、机上の知識では得られない「食文化への理解」です。

忙しい日々の中でも、休日に料理に挑戦するのも良いものです。普段料理をしない人でも、季節の野菜で味噌汁を作ったり、秋の味覚を取り入れた炊き込みご飯を作ったりすれば、家族もきっと喜ぶでしょう。きのこを具材にしたパスタや煮込みうどんも、スマホのレシピどおりに進めれば意外と簡単に美味しく仕上がります。



食卓を囲み「おいしいね」と笑い合うその時間には、料理以上の価値があります。食は人をつなぐものであり、季節の恵みを分かち合う喜びこそが、日本の食文化の本質なのです。

秋の味覚を味わいながら自然への感謝を忘れず、料理を通して文化に触れる。こうした積み重ねの中にこそ、真の教養が育まれていくのではないでしょうか。食欲の秋は単に「おいしい季節」というだけでなく、自分の感性と知性を豊かにする季節でもあるのです